

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520281

研究課題名（和文） スイスの多文化主義とナショナル・アイデンティティ

研究課題名（英文） Multiculturalism and national identity in Switzerland

研究代表者

増本 浩子（MASUMOTO HIROKO）

神戸大学・大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：10199713

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：独文学・スイス文化論

1. 研究計画の概要

本研究は多言語・多文化の国スイスの特殊性を明らかにするとともに、スイスのナショナル・アイデンティティをめぐる政治的言説と文学との関連について考察することを目的とする。その際、特に次の2点を明らかにすることに重点を置く。

(1)多文化共生社会のモデルとしてのスイス：

①ユートピア・モデル：スイスはどのような点において、多文化主義をめざすEUの未来を先取りしているか。

②アンチ・ユートピアモデル：スイスが陥っている多文化主義のジレンマとは何か。

(2)スイス表象をめぐる文学と政治の関係：スイスにおいて文学とナショナリズムがどのように関わってきたか。

2. 研究の進捗状況

主な分析対象としては、20世紀を代表するスイス人作家マックス・フリッシュ(1911-1991)とフリードリヒ・デュレンマット(1921-1990)のスイス論を取り上げた。このふたりの作家に注目するのは、彼らがスイスの文壇や読者たちから「非国民」扱いされながらも妥協することなく、偏狭なナショナル・アイデンティティに固執するスイスの閉鎖性を批判し続けたからである。スイスの多言語・多文化状況に関しては、スイスの哲学者エルマー・ホーレンシュタインの考察(*Schulbeispiel Schweiz*, 1998)を参照した。その結果、次のような点が明らかになった。

(1)ホーレンシュタインは、ヨーロッパでナショナリズムが高揚し、同一の言語の使用こそがネイションの証とみなされて、そのことが政治的な統一を正当化していた19世紀にあ

って、スイスが多言語主義の立場をとる憲法を制定したことを高く評価している。

(2)デュレンマットは、「盟約者団」としてのスイスがどのようにしてできたかという経緯が示しているように、スイスは小国の集合体であって、スイス人というネイションは存在しないということを指摘した上で、その国家形態がヨーロッパの未来を先取りしたものであると主張している。

(3)しかし、その一方でデュレンマットは、スイスそのものが多言語の国であっても、ひとりひとりのスイス人は必ずしも多言語使用者ではなく、特にドイツ語圏スイスとフランス語圏スイスとの間に深い溝があることを指摘して、スイスにおける多文化共生は多くの場合神話にすぎないことを明らかにした。

(4)さらにフリッシュは、英雄ヴィルヘルム・テルにまつわるスイス建国神話を書き換える作業を通じて、テルを国家的イデオロギーに利用しようとする現代スイス人の態度を批判した。

(5)自由、中立、多言語・多文化主義というスイスの国是が一方ではEUの未来を先取りするものでありながら、他方ではやはり理想通りにはいかない現実がある。にもかかわらず、理想郷スイスという国際的な「誤解」をいいことに、スイス人自身もその現実から目をそむけていることを、ふたりの作家は批判しているのである。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

本研究課題は、フリッシュとデュレンマットの作品を中心とするテキスト分析の作業に

関しては、ほぼ申請時の計画通りに進んでいる。成果発表に関しては、申請時に予定されていた国際会議等が開催されず、そこでの発表ができなかったものもあるが、その代わりに、以下のような2つのプロジェクトとの交流の場を持つことができた。

(1)日本学術振興会「人文・社会科学振興のためのプロジェクト」研究領域 V-1、第2グループ「越境と多文化」(グループリーダー：楯岡求美・神戸大学准教授)とベルリン自由大学(研究代表者：ゲオルク・ヴィッテ教授)との共同研究に参加して、スイスの多言語・多文化状況に関する研究発表を行った(2009年)。

(2) 科研費 (B)「世界文学における混成的表現形式の研究」(研究代表者：土屋勝彦・名古屋市立大学教授)による国際シンポジウム「アイデンティティ、移住、越境」に通訳として参加した(2009年)。

4. 今後の研究の推進方策

本年度は研究期間の最終年度なので、これまでの研究成果を踏まえて、スイス表象をめぐる政治的言説と文学との関係を、特にフリッシュとデュレンマットの作品を中心に論文にまとめることを最優先課題とする。その際、このふたりの作家のスイス論のみならず、文学作品(戯曲や小説など)も視野に入れる。昨年度までの研究で、上記「研究計画の概要」で挙げた「(1)多文化共生社会のモデルとしてのスイス」の部分は、すでに論文などで成果発表することができた。したがって今後は特に、「(2)スイス表象をめぐる文学と政治の関係」に重点を置いて論文を執筆することになる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 増本浩子「スイスにおける多言語・多文化主義」、『神戸大学文学部紀要』第27号、2010年、pp.17-33、査読無。

② 増本浩子「スイスの国民投票から見えてくるもの」、『DA』(神戸大学ドイツ文学会編)第7号、2010年、pp.31-39、査読無。

[学会発表] (計3件)

① MASUMOTO Hiroko: Peripherie als Zentrum: Multikulturelle Situation in der Schweiz.

Internationales Kolloquium „Illusion der Grenze: Dynamik der kulturellen Prozesse zwischen Zentrum und Peripherie“ (ベルリン自由大学主催), 2009年3月2日、ベルリン自由大学(ドイツ)。

② MASUMOTO Hiroko: Die Schweiz — ein ideales Beispiel der multikulturellen Gesellschaft?

Asiatische Germanistentagung 2008 (日本独文学会主催)、2008年8月27日、金沢青陵大学。

③ MASUMOTO Hiroko: Erkenntnistheoretische Überlegungen in Spätwerk Dürrenmatts. Humboldt-Kolleg Rikkyo 2008 (アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(ドイツ)・立教大学共催)、2008年3月15日、立教大学。